



洗練された文化の中に
今も田園の匂いが残っている。

むさしの
Talk
志茂田景樹さん

志茂田景樹 (しもだかげき)

1940年、静岡県出身。1980年、『黄色い牙』で直木賞を受賞。1999年に「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、子どもはもちろんのこと、大人にも読み聞かせの持つ力を伝えてきた。2010年4月に開設したTwitterでは若者の悩みに答えており、人生の苦楽からにじみ出るその言葉は、フォロワー約25万人という大きな反響を呼んでいる。

ツイッターを通じて、若者たちの人生相談に応え、絶大な支持を得ている作家の志茂田景樹さん。この街から離れられない理由をお聞きしました。

武蔵野市には昭和27(1952)年、僕が中学1年生になった時から住んでいます。国鉄に勤めていた父が定年退職して、武蔵境駅の北側に家を建て、以来ずっと同じ場所です。あの頃は、畑と農家が点在していて、風よけの竹林もたくさんあった。春になるとタケノコをすいぶんもらったものです。

あの頃の小中学生はみんな雑誌を買っていたんです。「冒険王」とか「おもしろブック」とかね。武蔵境にも本屋はあったけど、吉祥寺まで買いに行きました。地域で一番大きな本屋があったから、境よりも4、5時間早く雑誌が到着するんですよ。早く読みたくて、学校から帰ると一目散に吉祥寺に向かいました。

当時は畑だらけだったし、まだ肥料として人糞もまいていた時代ですよ。でも、この街にはどこか文化の匂いがした。住んでいる人が都心に働きに行つて、夜になると帰ってくる。東京にアメリカから新しい文化がやってくる、その「匂い」みたいなものを持ち帰ってくるんです。電車で40分、50分で都心の文化発信地があり、そこに本物がある。だから、米日した歌手がラジオで歌っていても、どこか生で聴いている感じがした。もつと離れた地域の人が同じ放送を聴くのは、明らかに違う感覚だった



と思いますよ。

昭和30年代からは高度成長期でどんどん住宅ができていった。2、3年離れたら、浦島太郎になってしまいうぐらの変わりぶりでした。

作家になつてからは、都心で仕事をするようになりましたが、自宅はずっと武蔵境。もう60年も住んでいるから、好きとか嫌い以前に、なじんじやっていますよね。武蔵野市には洗練された文化の香りのなかに、田園の匂いが今も残っています。この街を離れられない理由は、やっぱりそこにあるんじゃないのかな。

PRESENT

今回取材した、志茂田景樹さんの直筆サインを抽選で5名の方にプレゼント！詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。

